

©2020年6月

◎第1944回 定期公演 Aプログラム

グスタフ・マーラー（1860～1911）の《交響曲第9番》は彼の最後の完成作であると同時に、古典派の作品以降、拡大と変容を続けた「交響曲」の軌跡の終極にある。N響初登場のケント・ナガノが、有機的に展開するこの音楽をどう掘り下げ、楽譜の行間から何をえぐり出して私たちに突きつけるのか、興味は尽きない。

■マーラー

■交響曲 第9番 ニ長調 （約81分）

1909年春、ニューヨークのメトロポリタン歌劇場の指揮者を退任したマーラーは、従来通り作曲に専念するためにヨーロッパへ舞い戻る。その夏は、前年からの新しい拠点、南チロルのトブラッハ（現イタリア・ドッビアーコ）に滞在し、《交響曲第9番》の作曲に没頭。8月にはブルーノ・ワルターに宛てて、新しい交響曲を「狂ったように大急ぎで書きなぐった」と伝えている。書き上げられた楽譜は、ニューヨークで清書された。

その2年前、1907年はマーラーにとって公私ともに激動の年であった。年明け早々、ウィーン宮廷歌劇場総監督であった彼の運営を非難する動きが激化。水面下でウィーンの辞任とニューヨーク行きを決めたマーラーは、夏をいつものマイヤーニヒで過ごす。長女の急逝、自身の心臓病の診断を経て、その年の暮れにはウィーンを後にする。

1908年の《大地の歌》では現世との別離、生への憧憬が歌詞とともに直截的に表現されている。その精神世界、つまり死の影を、マーラーの同時代人や後の人々は、歌のない《第9番》の中にも見出してきた。だが、「死」は《第9番》だけのテーマではない。マーラーは初期の段階から、時代精神でもあった生と死の美学を私生活とは別次元で音楽に織り込んできた。《第9番》ではどうか。《大地の歌》の終曲〈別れ〉の最後に現れる「永遠に（エーヴィヒ）」のモチーフは、《第9番》の冒頭に引き継がれる。また、第3楽章の半ばから支配的となる、ある音を中心に転回するターンの音型（たとえば「ミファミレミ」のように）は、25年前に《さすらう若者の歌》で恋人との別離を表現して以来、時折登場していた。さらに第4楽章終盤には《亡き子をしのぶ歌》の旋律が、彼の常套（じょうとう）手段である「引用」という形で姿を見せる。最終小節の「息絶えるように（エアシュテルベ

ント)」の表示は、《交響曲第2番》《第4番》《第7番》《大地の歌》にも使われている。

こうして一心不乱に《第9番》に向かっていた頃のマーラーは、実のところ不安を克服し、活動意欲も旺盛（おうせい）であったようだ。1909/10年の楽季にはニューヨーク・フィルを約5か月で47回も振るなど、まことに精力的である。この状況に鑑みれば、当時のマーラーは“瀕死（ひんし）の作曲家”ではないし、この作品を“作曲家の悲痛な心象風景の投影”とする一義的な解釈は成立しない。「生の充溢（じゅういつ）」のうちに「深い諦念」を表現するマーラー流の芸術的所産こそが《第9番》なのである。

マーラーは「交響曲」のスタイルにも挑み続けた。《第9番》では「アンダンテ」と「アダージョ」という両端の長大な緩徐楽章が、滑稽味（こっけいみ）を帯びた「レントラー」と「ロンド・ブルレスケ」の2つの楽章を挟み込む。この配置とバランスの妙も、《第9番》の傑作たる所以（ゆえん）だろう。第1楽章は「永遠に」の主題など3つの主題群がソナタ形式の限界を超えようと変形を続ける。3種類の踊りからなる第2楽章が素気ない表情を見せるのに対し、続く第3楽章は荒々しく突き進む。突如現れる穏やかなターンの音型は、第4楽章に入って弦楽器の張り詰めた音の連続へと至り、やがて静けさの中に溶けていく。

作曲年代：1909年夏。1910年4月1日完成

初演：1912年6月26日、ウィーン、ブルーノ・ワルター指揮、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

（山本まり子）